

「2・太宰府謫居二期 延喜元年（九〇二）初冬〜延喜二年（九〇二）早春」

この期の作品としては「東山小雪」から「梅花」を想定している。この時期、延喜元年の冬を迎える頃から道真の詩風に変化の兆しが見えて来るように思う。具体的なこの期の道真の詩の傾向として次の二点を指摘することが出来る。

「1・太宰府謫居一期」時に詠まれている作品群に比して道真自身が、精神的に或る種の安定が見られるようになったことが大きいと思われるが、「自然の事物」を「事物」として見つけることが出来るようになり、その「事物」に「自己の感情移入」を図る作品が目立つようになる点が、まず一点目である。そしてその「自己の感情」とは、主に「望京の念」と換言してもよい。

そして二点目は、道真の得意とする「見立て」の技法を駆使する作品が目立つ点である。これは道真の「詩人」としての自負、執念なるものが或る種の精神の安定期を迎え、表出した事象とも言い換えられる。

ここでは「東山小雪」「雪夜思家竹」「元年立春 十二月十九日」「梅花」の四首を取り上げ考察をする。

「3・太宰府謫居三期 延喜二年（九〇二）春〜延喜二年（九〇二）冬」

この期の作品としては「奉哭吏部王」から「偶作」を想定している。この期の作品群の特質として次の二点を指摘したい。

その一つは、「仏教への傾倒」である。死期の近い事を悟りつつある道真にとって死後の世界に心の安泰を求